

こどもものいだく両親像

両親との生活交渉、およびその印象点について

室 谷 幸 吉

子どもは親の姿をうつす鏡である、と私たちはよくいう。まったくその通り。子どもという鏡には、親の言語特徴・行動特徴・食癖・趣味癖・思考の偏り、など、親の生活の全面がうつしだされる。

子どもはうつしとつたものをコトバとして反射する。そうした子どものコトバから、ひろい出される親の印象には、思わずオトナの私たちの目のチリを払われるようなことがしばしばある。たぐまずして発せられる子どものコトバが、正鵠をえた親への批評であり、痛烈な批判であることが多い。虚心坦懐に、これら子どものコトバに耳を傾けよう。子どものコトバを通して、親自身、親としての在り方を反省することは、また賢明な生き方といわれるであろう。

ママは、ふつうのときは、かわったことばはつかわないけど、でんわなんかに出たときは、おわりのほうで、きまって「ざあます。」なんてことばをつかう。それからパパは、「はやくぼくが大きくなってパパのはなしあいてになってくれよ。」っていった。

△七才・やすよし▽

子どもは、親のコトバぐせなど、よく聞きとめているものだ。しかもそれは、単に切り離された一語一語としてとらえているのではなく、親の性格をグサリとえぐりとつた形でとらえているものではない。子どもなりの親に対する人間評価という意味で、大いに人たちの関心をひくのである。「早く大きくなって、パパの話し相手になってくれよ。」——この父親（製菓業）のコトバの中には、ひとり息子にかける、せつないまでの父の至情がくみとれもする。

うちのおかあさんは、「べんきょうをしなさい。」って、毎日二へんいじょういうから、学校からかえるとき、ぼくは、おかあさんがいるといやだなあ、とおもってかえる。

それから、おとうさんは、うちへかえってくるすぐ、「おさけをいっぼんちょうだい。」っておかあさんにいうから、おかあさんは、ちゃんとういして、おとうさんがかえってくると、おかあさんが、「はい、おさけ。」っていう。するとおとうさんは、「ありがとう。」っていう。おかあさんが、おさけをようお願いするの

をわすれているとき、おとうさんが、「いやっちゃん。」なんていうからおかしい。

△七才・あきら▽

「おかあさん」というコトバをうら返すと「勉強」や「宿題」というコトバが現われる——こういう母との結びつき・とらえ方をしている子どもが、ほんとうに多い。おかあさんのいない家に帰るのはさびしく、おかあさんのいる家には、とんでも帰りたい気もするが、一面そのおかあさんの口から出る「勉強しなさい。」のコトバを思いうかべると、気もふき足も重くなって、帰宅をしぶる子ども心に納得もいく。母親の度を越して、グチにも近い勉強干渉が、まったく実効のないお題目みたいになっている現状には、考え直し、改めねばならぬ多くのものがありそうである。

お銚子一本に家庭でのたのしみをつないで、いそいそと帰宅する父親の姿は、なんともほほえましい。

おかあさんは、あたしがべんきょうをしない日なんか、ときどきだけど、おとうちゃまにいつつけるからいやだ。それに、あたしがべんきょうをしていると、「たか子のおもりをしてちょうだい。」というから、ぜんぜんべんきょうができないから、いやだ。それで、あたしがべんきょうしないで、たか子のおもりをしているときは、「おもりなんかあとにして、べんきょうをしなさい。」というから、いやんなっちゃう。

△七才・かず子▽

これはまた手のこんだおかあさまの勉強攻勢である。父親まで巻きこんで、両親グツツをそろえての協同攻勢には、子どももたじたじであろう。それはまだしも、ここにガマンのならぬのは、母親の

場あたりのな「いつけ」の不統一さである。まことに便宜主義・御都合主義な『いつけ』ぶりに、子どもはとまどい、矛盾を感じる。やりばのない不満を胸の中にとらせている子どもの弱い立場には、同情を禁じえないものがある。

理にかなうものと、理にかなわないものを見わける子どもの能力を軽くみてはなるまい。子どもに接する親の態度に矛盾と不統一があることは、致命的な傷である。スジの通った態度で子どもに接することは、なんにもまして大事な、親としての基本的な条件なのだ。

うちのおとうさんは、すぐにウソをつくの。このまえに、おとしやさんのおばさんに五十円もらったので、もっていたら、おとうさんが、「しまっ」といってくれる。」っていった。けど、いまだになっても、それをかえしてくれないの。それだから、わたしは、ちよきんを三千元と二十一円しかもっていない。だから、さっきの五十円もらえば、三千元と七十一円になるからいい。

このまえ、おかあさんとおとうさんのはなしをききました。はなしはね——おとうさんが、おかあさんに、なにかはなしをしていたら、でんわがかかってきました。きつと、やくしょからだから、(この子の父は市役所勤務)おとうさんは、「びょうきなので、やすましてもらいます。」とだました。でも、わたしは、わかつていました。

△七才女・けい子▽

『オトナの胸のうちは見ぬいています。けれどわたしはだまっています』という、ことさらにとりすましている子どもの態度には、恐れ

をさえ感じる。よし親の側に悪意はないとしても、その場のがれの安易な気持で、ナンの子どもだからと軽卒に、いいかげんにあしらっていくのは、子ども心にひどい傷をのこす。手をつくして子どもを納得させることの必要を、まぎまぎと感ずる。うるさい子どもは口封じの手段として、「後からしてあげるわ。」とか、「ハイハイわかったわよ、いいとも。」と、軽くうけ合い、聞き流して、そのままにしておくことは、誰しも身におぼえのあることであろうが、こんなところから、子どものチャランボランな無責任な態度やなげやりな手口が養成されるのだ。ウソは、オトナの前でより、子どもの前でこそ慎みたいものである。子どもの敏感な感受の機構は、だまっけていても、オトナのウソや手前勝手を目ざとく耳ざとく見ぬいている。父親母親のいうことには、アテにならぬものがかなりふくまれている、と考える親不信の感情傾向をもつ子が相当にめだつ。

「それ、またウソでしょう。」とつめられる親は、何ほどかの親性失格者であるにはちがいない。こういうことは親子間に作りあげねばならぬ親和感情を損う好ましくない傾向である。親たちは子どもだからとあまくみないで、対等の人間としての責任ある応待を考えねばならぬようである。

すべての子どもは親をもっている。しかし、このあたりまえの人間的な結びつきの中に、その子の一生を支配する重要な契機がひそんでいることを思うと、なかなかどうしてあたりまえなことではなく、通り一べんの『あたりまえ』顔して見すごしえないものがある。

両親は、子どもにとって、最初にあらわれる規範的な人間である。子どもは、父親を通して男性の在り方を学び、母親を通して人間としての女性を理解する。つまり親というものは、子どもにとって最も身近で、てっとり早い人間のお手本なのである。親と子という血のつながりは、子どもらに、しばしば親というものを無条件的な絶対者であるかの如く思いこませる。

「親は親たらずとも、子は子たらずべからず」式の封建的な家族制度に支えられた修身道徳は、そのような基盤に植えつけられた「まちがった考え方」の一つの樹木である。絶対的服従や「アキラメ」の強要を内にひそめた肉身倫理を、永遠の真理と考えさせてよいものかどうか。子どもたちにも、とっくりと考えさせたい人間関係についての問題点の一つである。

乳飲子であっても、いやだと思ふ時は、「いやいや。」とカブリを振って、父に向かつて、母に向かつて不快や拒否の態度を示す。自分の意思にそぐわないものに対して、ハッキリ「いやだ」と反対する乳飲子のこの態度が、実は「人間評価」の芽ばえだといえよう。ある日の、ある時の、ある人との接触において、その人を好ましく思い、或いはまた、いとわしく思う、そういう心情の積み重ねが、その人に対する一定の評価を、やがて形づくるのである。

子どもが胸にいだく理想的人間像の軸になっているものが両親であることは、だれでもたやすく気づくことであり、またそうであることの自然さは容易に了解されるだろう。なぜなれば、子どもが一人前の子どもとして育ちあがる数年の成育史のなかで、一ばん多く

接触し、また生誕の最初から、強く深い接触と交渉をもつものか両親なのであるから……。

親の考え方は、子どもの精神を左右する。少し大げさにいえば、子どもの一生を貫く精神にある方向をあたえる。『親のいうことに反対する子はゆるぎれない。親はいつも至上至正のものだ。子どものくせに親のすることや言うことにツベコベ盾つく者は、家にはおかぬ』式の、かたくなな厳格主義で子どもを育てていると、頭のやわらかい未熟で世間しらずの子どもは、人間の生き方とはそういうもの、それ以外にはないものと一途に思いこんで、一応親のいうなりに動く人間になる。子ども自身、そういう両親絶対観と、そこから流れる絶対服従の態度を、最高の生活方法と心得、全く自主性のないお人形のような人間像を理想としていただくようになる。しかしこれはある時期に限られた一時的のもので、子どもの心性の未熟な間は、なんとかゴマ化し通せはするが、やがて子どもが、世間を広く見渡し、さまざまな人の生き方にふれるようになると、あたかも闇からおどり出て光明を得た人のように、急速に、ひがんだこれまでの人間像をぶちこわし、かわって新しい人間像を作りあげる。つまり子どもは、人間としての生き方の誤りはなんであるかに気づき、誤った人間像を自分の頭に流しこんだ父母の在り方に、きびしい批判を加え両親を評価することになる。

親の生き方の誤りは、親ひとりの失敗だけに止まらないのだ。その失敗は、子どもの生き方の深根にまでからみついて、好ましくない影響を残す。だから、たとえば子どもが「おとうさんの○○がい

△いなかのことはV——いつもおかあさまは、へんなことばで「すかん」というのできにさわる。

△きをつけてねV——いつもおかあさまはわたしたちに「きをつけてね」という。あんまりいつもいので、もう「きをつけてね」は、あきてしまった。

△おかえりV——いつも、おとうさまがかえってきても、わたしたちは「おかえり」をいわないの。するとおとうさまは、こどもたちはもうねたかな、と思ってる。おとうさまは、いつもわたしたちよりはやくねる。だからわたしは、いつもへんだなと思う。

△七才女・たつ子V

★——母のことばグセに対する多少の不快感、それから父との生活関係における幾分の粗雑さが、子どものことばににじみでている。

けない。」とか、「おかあさんはだからいやだ。」とかいった場合、「まあ、アキレタ、親を親とも思わない、こまちゃくれた、おとなっぽいイヤナ子。」などにくむような、軽はずみな応待気分をもっているはいけない。

子どもは親の従属物ではない。まして付属物なんかではさらさらでない。子どものくせに、「子どもなんだから」と、とかく一枚も二枚も下に、低く子どもを見る、オトナの習性化した子ども観は、まさに危険であり、子どもにとって実は迷惑以外の何物でもない。たとえばそれが三才の幼児であろうとも、対等の人間であり、平等な主体者として接する心ぐみを忘れてはいけない。未熟な者、未成年者を、身体的精神的に保護し、養護し、監護することと、これとは決して衝突したり矛盾したりすることではない。

子どもをほんとうに幸福な人間にしようとするならば、まず以て、親の生き方が正されねばならぬ。親自身が、どのような人生を行ずるかに、真剣に考えをおよばさねばならぬ。子どもらは、例外なく、その親の生き方をなよりの手本とし、また第一級の素材として、それにあうような人間像を心の中にうみ出し作りあげる。

人格的に欠陥のある親をもつ子は不幸である。人間破産者ともいわれそうな親から生みおとされた子は不幸である。子どもの不幸を生みだしている源は、親の生き方にある、という実例に、私たちはあまりにもしばしば出会うのである。正しい人間像の形成にあこがれ、広い知恵と目をもつてきた子どもらは、遠慮会釈なく、批判のコトバを親に向かってなげつけるようになる。それこそは世にまたとない「善言」「箴言」といふべきだ。

親と子どもと、開放されたフレイキで、気やすく話し合える場をもとう。そして隔意のない話しことばに、たがいに耳を傾け、その上で誤解は正し、修正すべきことはサラリとこたわりなく修正しよう。そういうところでこそ、おたがいはメンツにこだわらず、気前よく積極的な前向きな姿勢をもちたいものである。

子どもらは、父親に対してと母親に対してと、いずれの場合でも、同じほどの印象度をもつものであるかどうか。

これについての私の調べでは、一般に、子どもらの印象度は、母親に対して強く、父親に対しては弱い、という結果がでている。もとよりこれは大勢の子どもの傾向を総体的にながめた判定であつて、あるひとりの子どもに限つてみた場合、必ずしも、そういうえない

パパはたいがい、ぼくをおこす。ちょっと口だけではおきない。だからおいはぎをする。それでなければ、すこし口でいって、つぎにママがきて、おいはぎをする。ようふくきるときは、ママでもパパでも、「はやくしろ。」っていう。学校にいくときは、ママが、「はやくしなさい。」っていう。きょうなんか、うちをでるとき、ぼくが、「おやつとついてね。」っていったら、「おやつのことなんか、きにしないでいいの。」っていった。

〈七才男・正広〉

★——子どものスロモーに対する両親の攻勢を受けとめている子どもの表情が見えるようである。といつて親子間の親和関係は害われてはいないようである。

場合のあることは、もとよりである。対人印象の度合(強さ・広さ)を、今かりに点数で表わすとすると、父親の二点に対して、母親の方は三点ということになる。ことばをかえれば、母への印象度を一とすれば、父親に対しては母より薄く、三分の二の濃度しかもたないということである。これは、子どもとふた親との、生活接触の、主として時間的多少と比例しているようにみうけられる。子どもの心の中で、父親というものは母親にくらべて、かなり軽い位置づけしか得ていないという事情を、もの語っているようである。——この比は、人間的結合の強さや広さ・深さをも同時にもの語っている。善悪いずれの面においても、母親の影響度は、父親に比してはるかに大きいのである。母性の礼賛されるゆえんであろう。

まず母親に対する子どもらの印象点の特徴といったことに目をむ

けよう。

まず第一に気づくことは、「のろのろしないで早くかたづけなさい。」「早く学校へいきなさい。」「早くねなさい。」「早くおきなさい。」「早く帰っていらっしやい。」「気をつけてネ。」といった『しなさい型』の「しつけ」に関するものが圧倒的に多いということ。さらに特徴的なのは、こういう『しなさい』の中でも、「勉強をしなさい。」が、他の「しなさい」の二倍強もあるということ。

「○しなさい」——この何かの行為をすすめる言い方は、生活指導面での積極型に入れるべきだろうが、それにしても、あまりにも自主的でない、浅薄な「おしつけ命令」が多いようである。アヤツリ人形か、せいぜい粗末な出来合いの小機械程度にしか扱ってこない親たちの、自分に対する取り扱い態度に、子どもらは、おしなべて不満をいだく。そして、「またしても口うるさい干渉が始まったわい」と、しばしばソッポを向くことになる。

つぎに多いのは、「しつけ」の中の『する型』(禁止型)で、これは『しなさい型』の三分の一ほどある。そして、この『する型』は、子どもらに、「おかあさんのグチ」としてうけとられていく傾向が強い。「コラ、やめなさい。」という頭ごなしの落雷の一喝。「うるさい、しずかにして。」それから、「あの子ったら、ほんどにしようがない。」「しようなない子だ。こんなことできないで赤ちゃんみたい。」といった、ほんもののグチまでもふくまれる。

『する型』とほぼ同数なのは、両親の対人態度に関する印象。

——来客があると、きまって、「まあ少しあがっていただくさい。」

という母。(接客態度)「お客さんがいる時、なぜあんたはグズグズいうの。」と客が帰ってから子どもにもグズグズいう母。「どこどこにいつてくるわよ。」と、外出がち、日毎に家をあけたがる病の母。そうかと思うと、道で知人に出会うや「アーラ、おくさま、お元気でいらっしやいまして……。」からはじまって、あのこと、このこと、とめどなく話しつづける奥様族の長つたらしい立ち話まで——。ところが父親に関しては、こういう面のこういう角度からの印象は、一つも見あたらなかった。

母親についての金銭的な面の印象は、ほとんど父親に「お金ちようだい。」である。「ボクのお金へおこずかい」のチャイチャイの御用立てに、いささか不顔をみせる子どもも見あった。

ところで、「遊び」を背景とした印象は、父親母親のどちらをみても、まことに少ない。意外なほどである。母親については、ただのひとりもいなかった。父親については、「私をオートバイにのせて、すぐどこにでもつれてくれます。」といった女の子がひとりだけあった。

父親のコトバぐせについては、つぎのようなものがめだつ。

「ぼくのことをクソボウズという——いやアなおとうさん。」「名曲名曲と、しきりにいつて、ラジオのスイッチをいれる。」「かわいいハルちゃん、かわいいハルちゃん」と私にいう。「子どもってものはナマイキですね。」と、すぐにおかあさんとはなしている。「ぼくが、おかあさんや、しんせきの人から、何か買ってもらったりますと、ア、ズルイゾ、ズルイゾ」という。」などと、好感・不

快感が入りまじっている。母親の側にはなくて、父親の側にだけみられた食生活に関する印象というのは、こうだ。「ぼくに、ゴハンをもっといっぱい食べなさい。」という。」

「お酒一本ちょうだい、ときまっという。」

これらの調査を通して、私が強くいだいた感想の一つは、——なにかとして、父親と子どもとの生活接触の機会や時間を、ゆたかにもつように考えねばなるまい、ということ。家庭は、母親たちにとって、子どもたちとの接触交渉をいよいよ緊密化し、拡大することがゆるされる事情にある。これはまことに好ましいことなのだが、それに比べて、一方の父親側の状況は、あまりにみじめで心細さをさそう。家庭内における被扶養者の余暇の増大は、いろいろな形をとって、扶養義務者である父親の肩に、いっそう重くのしかかってくる傾向にある。目につく経済的負担の増大である。まごまごしている、すべての父親はひとしく生産機械化し、人間放棄の方向に追いやられる危険がある。そこで、五日制労働や、労働時間の短縮、或いはまた円滑な昇給などは、父親の人間回復——というよりは、人間持続のために、当然考慮されねばならぬ現代的課題となってきた。

感想の第二点は、子どもらのいづく父母の印象の大半が、命令や禁止の形をとった「しつけ」に關係があるということ。

「いい子どもに育てよう」という親の至情のあせりが、つい、コゴトやグチャ、イイツケの形をとったものであることはうなずける

が、それにしても、子どもらにケムたがられ、ソッポを向かれる、こういうやり口は、思うほどには効果のないものである。それどころか、逆効果の方が大きいかもしれない。もっとあかるく朗かな、いえば陽性な印象をうえつけるような工夫が、めぐらされていいのではないか。

おしまいに、両親が、子どもとの生活接触を、望ましく、効果的におし進めるための留意点を二、三あげよう。

一、子どもなんだからと割引きせず、すべて一人前の人間としてあつかう。つまり人権を真の意味で尊重し、完全な人間平等観にめざめることだ。

二、その場限りのいいくるめや、口先だけのウソ・ゴマカシはやめなさい。すべてに誠実で、責任ある態度と行動とを持すること。

三、親しみ話しあい、ともに遊ぶ時間を、一分でも二分でもいいから、とにかくやすように気を使いなさい。

これらは、子どもをほんとうにりっぱな人間にするための絶対的要請である。こういう態度と方法で遇せられる子どもたちは、例外なく、円満な人格の持主になるだろう。自主的で自立心の旺盛な子どもになり、バリバリ仕事をかたづけしていく人間になるだろう。子どもらは、自らのなかにひそめている能力のすべてを、存分に発揮するだろう。

また、こんにちの子どもたちは、親たちの愛をさえ、敏感に評価したり、批判したりする知恵と力量とをもっているものであることを、どうぞお忘れなく。

(明星学園)